

## 学校臨床総合教育研究センター分室 活動報告(1)

### 東京大学教育学部附属中等教育学校 こころの相談室「ほっと・ルーム」活動報告

#### 1. はじめに

分室での活動が5年目を迎えた。本年度の「ほっと・ルーム」における目標は、この学校臨床総合教育研究センター年報のタイトルでもある「ネットワーク」である。そこで本年はこれに基づき、昨年までの活動に加え、①生徒とのネットワーク作り、②校内の先生方とのネットワーク作り、③大学とのネットワーク作り、④学外機関とのネットワーク作り、の4つの側面から、こころの相談室の拡充を目指した。

#### 2. 本年度の「ほっと・ルーム」の様子

開設当初より当相談室では、学校におけるカウンセリングルームの敷居の高さを見直し、生徒達が気楽に相談できる「居場所」としての部屋作りを目指してきた。開設して4年目に入ったこと、さらに校内の先生方の積極的な協力があり、学内でも名前、場所ともに認知されつつあるように思われる。部屋の利用方法も生徒によって様々となってきた。生徒にとってほっと・ルームは、文字通りカウンセリングルームという役割だけでなく、1人でじっと考え込む場、愚痴を思いっきり吐き出す場、

歌、演奏、ダンスをひそかに披露する場、落書きや紙粘土で作った作品などをさりげなく飾る場、ふとさびしくなった時に立ち寄る場、友人とゆっくり話す場、そしてストレスを発散する場といった役割を持っていたように思われる。このようにほっと・ルームは、生徒達にとって、相談する特別の部屋ではなく、授業の合間や放課後にふらっと立ち寄り利用することができる「居場所」として学校内に位置付けられつつあるように感じられた。

#### (1) オープンルームについて

昨年度の「オープンルーム」(誰でも、自由に出入りできる時間)の成果から、本年度も、「生徒が利用しやすい空間作り」をめざし、できる限り、生徒のあき時間に、部屋を開放するよう心がけた。

オープンルームに訪れた生徒数を表1～表2、実際の相談に訪れた生徒数を表3にまとめた。本年度もこれまで同様、利用者のピークは5月、であった。ただし本年度はその後7月にもピークが見られた。例年に比べ、男子生徒の利用率が圧倒的に増加し、その中でも特に中学2年生、3年生の男子生徒の数が目立った。ピーク時にはほっと・ルームに入りきらずに外の廊下にはみ出てい

表1 2001年度 ほっと・ルームオープンルーム (男女別) 利用者数 (週に5日開室) \*四捨五入

	4月	5月	6月	7月	夏休み 5日間 のみ	9月 (秋休)	10月	11月	12月	1月	2月	3月 (春休)	合計
1～3年生 男子	163	433	238	363	14	133	58	175	153	185	133	39	2,087
1～3年生 女子	20	23	50	35	7	5	33	50	18	28	50	26	345
4～6年生 男子	20	35	20	10	0	45	13	5	5	28	18	7	206
4～6年生 女子	3	20	3	0	1	10	0	0	10	5	12	6	70
来室総数	205	510	275	408	22	193	103	210	185	208	213	78	2,319

\*注：表中の数値は週に2日しか来談者数を確認できなかったため、それを5日あたりに換算した。

表2 2001年度 ほっと・ルームオープンルーム (学年別) 利用者数 (週に5日開室) \*四捨五入

	4月	5月	6月	7月	夏休み	9月 (秋休)	10月	11月	12月	1月	2月	3月 (春休)	合計
1年生	8	110	68	20	1	5	0	8	0	10	34	33	297
2年生	28	25	53	48	9	20	75	205	138	108	121	28	858
3年生	148	320	168	330	11	113	15	13	33	95	28	4	1,278
4年生	20	43	23	8	0	38	13	5	5	25	18	5	203
5年生	0	5	0	3	0	0	0	0	0	3	0	0	11
6年生	3	8	0	0	1	18	0	0	10	5	12	8	65

\*注：表中の数値は週に2日しか来談者数を確認できなかったため、それを5日あたりに換算した。

表3 2001年度 ほっと・ルーム 面接など利用者数

	4月	5月	6月	7月	夏休み	9月 (秋休)	10月	11月	12月	1月	2月	3月 (春休)	合計
生徒相談	0	4	7	4	0	1	6	12	3	7	9	5	58
保護者相談	0	1	1	2	0	0	1	4	2	5	4	3	23
先生との相談協議	4	2	4	7	0	6	10	5	8	6	5	4	61
見学者	0	2	2	10	0	0	6	2	4	0	3	0	29
研修会	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	1	5

て、廊下を歩きにくいとクレームが来るほどであった。

ほっと・ルームにおけるルール設定については、これまで生徒の自由と自主性を重んじるために最低限にしてきたが、本年度は①多数の生徒が同時に利用するようになり、管理者の目が届きにくくなったこと、②CDの好みの違いやグループによってその利用方法が異なることなどから、生徒同士の緊張感が高まる場面も見られたこと、の2つの理由から、トラブルの発生を未然に防ぐ必要性が感じられた。このため従来の「ごみや食べ残しの扱い」「パソコンやCDプレイヤーなど機器の利用制限」のルールに、新たに「このお部屋では、他の人のこころもからだも傷つけないこと。」というルールをつけ加えることにした。ルールは入り口のドアと部屋の中の2ヶ所に張りだした。勢いよく入室する子ども達の目に果たしてそのルールの掲示が見えているのか疑問であったが、それ以来、挑発的な発言や行動はなくなった。また場合によっては生徒同士で、「お前退場させられるよ！いいの？」とルールを確認する様子も見られた。今年度はこの規則が破られたことは一度もなかった。

オープンルームでもっとも利用されている玩具は、大きなくまのぬいぐるみ、ギター、将棋、チェスである。この中でも大きなくまのぬいぐるみは、必ず誰かが抱いているか、攻撃的的となり、絶えず誰かが持っているほど人気があった。またギターは、ただ音楽に親しむだけでなく、1つの表現の題材としての役割を果たし、多くの生徒がふらっとそれぞれの音を奏でに、また楽器の扱いなど教えあっていた。ぬいぐるみやギター将棋の箱など、利用頻度が高いものは修理の必要があるものは、生徒達自ら率先して行っていた。

年間を通して見た場合、オープンルームを利用しているうちに、なんらかの悩みや相談を打ち明ける生徒も多く、オープンルームでほっと・ルームという部屋に慣れることの重要性を感じた。また最初は箱庭で遊んだり、ギターを弾いたりしているものの、タイミングを見計らい、徐々に悩みを話し出す生徒も多く、玩具は遊ぶものだけでなく、相談のきっかけや緊張緩和としての役割も

果たしていると思われた。

このようにプラスの面が多い「オープンルーム」ではあったが問題も発生しなかったわけではない。オープンルームの最中に相談希望者が来室した場合は、相談者が優先になることをオープンルームの約束としていたが、予約をなかなか入れることができず、かといって自分の相談のために他の生徒を追い出すことに抵抗があり、他の部屋にカウンセラーを呼び出して相談する事例も見られた。相談員が2人いたためこのようなオープンルームと面接との併用が可能となったが、多数の子ども達が入りやすくなったために引き起こされる、「住み分け」の課題が残されているように思われる。しかし逆に、まわりの生徒がいる方が、かえって目立たず、しかも緊張せずに相談できるという理由で、あえてオープンルームの時間帯に相談に来る生徒もいた。このような状況で活躍したのが、開室当初より、天井に設置されていた、ロールカーテンである。日頃「面接中」の札を入り口にかけて面接している際も、「ほんとうにダメなの？」と覗き込んできたり、いたずらで面接室の引き戸をわざと開けて通り過ぎる生徒に手を焼いていたため、このような分割方法では不十分なのではないかと懸念されたが、日頃「いたずら」する生徒達も、部屋を分割して相談している際は、となりをのぞいたり、聞き耳を立てる様子は不思議と見られなかった。

## (2) 個別相談について

個別相談の申し込み方法は前年度同様、①電話による申し込み相談、②直接来室、③申し込み用紙をポストに入れて予約するという3通りの方法である。本年度の①電話による申し込みのほとんどは保護者からであった。昨年に比べ担任から勧められての申し込みが減り、自発的な申し込みが多かった。③の申し込み用紙が利用されたことは少なかったがこの方法があることによって相談できる生徒もいるため、この方法も必要であると思われる。生徒の相談の中で最も多かったのは、②の直接来室による相談である。昨年度より「特別な相談をする場所」

というよりも「居場所」としての役割が強くなったため、オープンルームに来室して悩みを打ち明け、面接時間を予約してゆく生徒が多かった。生徒の相談内容には、教師や友人との対人関係、家族の中での悩み、進路への不安が多く、保護者の相談内容には、学校とのコミュニケーションの相談、家族のことが多く、昨年と比べ不登校の相談が少なかった。またほっと・ルームの相談サービスを保護者も利用できることを知らない保護者や教師がいたため、保護者面談の際、ほっとルームの案内を保護者に配布することになった。生徒の中には保護者にお便りをみせない生徒もいることを半年たってから知り、また配布以降保護者の利用が増加したことを考慮すると、従来通り、ほっと・ルームの利用案内を「ほっと・ルーム便り」第一号でお知らせするだけでは不十分であることが明らかとなった。

### 3. 生徒とのネットワーク作り

本年度は、例年カウンセラーが行っていた、「ほっと・ルーム」の仕事の一部をボランティアの生徒に協力してもらい体制をとった。ボランティアを募集した仕事内容は、①イラストレーター、②箱庭のパーツ作り、③大掃除の協力、④ホームページ政策班の4種である。いずれも、オープンルームに顔を出した生徒に声をかけたところ、みな快く協力が得られた。またこれらの生徒との協働作業は、生徒達が「自分の部屋である」という認識を高め、部屋を作り上げてゆくという自己効力感を通して、モラルが維持され、他の生徒との交流の潤滑油となっているように思われた。

#### ① イラストレーター

約月に1回のペースで刊行している「ほっと・ルーム便り」の挿絵を担当するスタッフである。1年生から4年生までの生徒が男女を問わず、交代で、テーマにあわせたイラストを担当した。生徒側からも、この試みは好評で、次第に誰のイラストかが話題にのぼるようになった。

#### ② 箱庭のパーツ作り

これは全くスタッフが意図せずに始まった仕事である。ある時、カウンセラーである筆者が、箱庭のパーツのカタログを「高い！高い！」と言ってみていたところ、覗き込んだ生徒の一人が、「そんなの、僕が作ってあげようか？」と言い出したことがきっかけとなった。和風の庭園を作る際に必要な枯れ木や、小石は、学校の校庭から拾い集められ、UFOや恐竜、いるかなど、これまでになかったパーツは、本来本年度より従来の油粘土に変わり、

導入された軽量の紙粘土によって作られた。

#### ③ 大掃除の協力

オープンルームをよく利用している男子生徒に大掃除の際に協力を依頼したところ、約束通りに、しかも、仲間を連れて手伝いに来てくれた。日頃、掃除の時間に抜け出してみたりする彼らの姿を見て、ふざけてしまったり、いい加減になってしまうのではないかと心配をよそに、彼らは、これまでそんな姿をみたことがないぐらい、ときばきといわれたことを片づけ、予定を大幅に繰り上げて終了した。

#### ④ ホームページの作成

4年生の情報実習の応用をかねて、ほっとルームに顔をだしていた、4年生有志の数名にほっと・ルームのホームページの製作を頼んでみたところ、快く引き受けてくれた。相談のない空き時間を利用しての作業のためやや時間を要しているが、ほっと・ルームのホームページが来室する生徒の手によって作られたことは、非常に意義深く感じている。

### 4. 校内の先生方とのネットワーク作り

本年度は、ほっと・ルームの開室に、相談スタッフだけではなく、附属学校こころのケアグループに所属する4名の教員の協力が得られたため、昨年4日だった開室日を、月曜日～金曜日までに拡大することができた。またオープンルームでの来室が多いクラスについては、定期的に担任や保健室と連絡会や勉強会を行うことで、なかなか目が届きにくい生徒への対応を検討することができたものと思われる。

### 5. 大学とのネットワーク作り

本センターでは、2000年より、附属中等教育学校と連携しながら、総合的な学習の一環として、高校生に対する「総合的心理教育」の授業を開講している。昨年度は、リチャード・ヘイズ教授(ジョージア大学)、マーフィー・重松助教授(本大学留学生センター)にもご協力いただき、既存の講義型授業ではなく、グループワークを主体とした心理教育プログラムを実施した。受講者は、高校3年生25名(男子9名 女子16名)、選択の授業のため全員希望しての参加である。プログラムは①自己理解、②他者理解、③生命体としての人間、④社会的存在としての人間、の4領域で構成され、授業が進むにつれ、生徒達の視野が広がるよう構成された。また全16回にわたる授業の大半にグループワークを取り込み、体験を通して学習する授業作りと、ライフスキルの実践的な向上を目的とした。なお授業計画、授業内容、実施上の問題点等

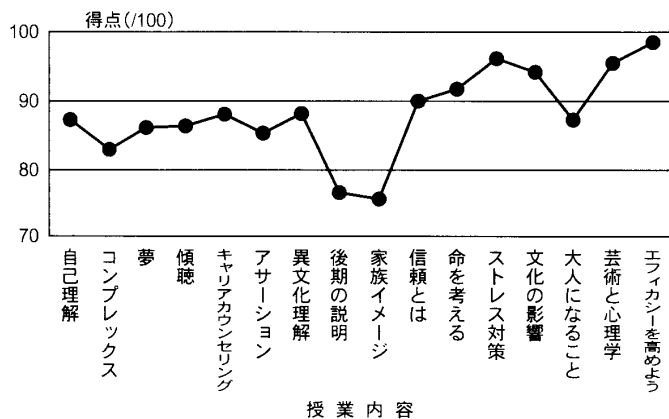


図1 生徒による授業評価 (平均点)

について検討するため、生徒対象の質問紙調査を行った。調査は毎回授業終了時に行われ、受講生徒に、5段階で授業の面白み、理解度、有用性についての評価を、さらに100点満点で授業の総合的評価を求めた。また終了時点で、受講生と非受講生の精神的健康度 (GHQ) とコミュニケーション・スキルについても比較検討した。

調査の結果、知識の習得を目指した前年度のものに比べ、グループワークを中心とした授業は生徒達の評価は全体的に高く、回を重ねるごとに向上している (図1)。評価が低下する回については、内面的課題に直面するレジリエンス、グループへの安全感の形成、課題の意味の把握、体験する場面での交流方法等の観点から検討する余地があることが示唆され、①心理教育のプログラムを作成する際、グループ形成過程を視野に入れながら、生徒にとって心理的負荷の低い課題から徐々に内面的な深い課題に移行させてゆくという配慮、②受講生一人一人の

精神的健康度等について、ある程度、事前に把握しておくことの必要性について今後さらなる検討が必要であることが示唆された。なお終了時点で得られた精神的健康度 (GHQ) の調査より、受講生の方が非受講生よりも精神的健康度が高い傾向が見られ、またGHQの得点分布についても、受講生の分布が非受講生ものと異なる傾向が見られた。

## 6. 外部機関とのネットワーク作り —講習会、校内研修会—

本年度は、附属と大学との連携を見直し、再度検討することを目的に、創始者である東京大学教育学部教授である近藤邦夫教授を招き、開室4年目となるこれまでの「ほっと・ルーム」の歴史を見直し、将来計画が検討された (なお、この時に近藤教授が行ったスピーチについては、その内容の概略を寄稿していただいたので、本章冒頭に特別寄稿として掲載する)。また実際に学校現場で起きている事例について検討する、附属・大学合同事例検討会が行われた。この事例検討会では、大学の心理教育相談室で本人面接の担当者、そのスーパーバイザーも招待され、それぞれの立場からみた生徒と保護者そして周りの生徒について、およそ4時間もの間、活発な情報交換や議論がなされた。さらに長年児童相談所でご活躍なさり、早稲田大学、日本社会事業大学などでも教えられている田中島晃子先生を招き、近年増加しつつある「虐待に関する校内研修会」も開かれ、虐待に関する法律、児童相談所などのしくみについての基礎知識および、実際の児童相談所の対応と公的機関との連携、学校における虐待事例への対応についてご講演いただいた。